

E L V導入による大学ラグビーの変化
Change in Rugby Match at University by introduced ELV
1 K 0 7 B 0 9 3 - 6 坂井克行
指導教員 主査太田章先生 副査島田陽一先生

「研究目的」

ラグビーは他のスポーツに比べルール改正が頻繁に行われるスポーツであり、2008年5月1日、アイルランド、ダブリンでIRBの理事会が開かれ、実験的競技規則に関する話し合いが行われた。試験的実施ルール（ELV）の導入が決定した。このELV導入は従来のラグビーの試合展開、戦術を変えることを狙って行われたものである。このようにルールが変化することにより、各チームは勝つためにルールに最も適応した戦術を考えるので、プレーや試合内容に様々な影響が及ぶ。この影響を明らかにすることで、大学レベルにおけるELV導入が試合、そしてプレーに与えた影響について明らかにすることを目的とする。

「分析方法」

2007シーズンと2008シーズン、2009シーズンの大学選手権での7試合、合計21試合について比較しキック、カウンターアタック、ラインアウト、ラインアウトモール、スクラム、ラック、ペナルティーゴール、総得点の8項目についてデータを収集し、この8項目の総数、平均値を取り各シーズンで比較することで、ELV導入による変化をみる。

「分析結果」

2007シーズンに比べ2008シーズンでは、キックは8本、カウンターアタックは47回、ラックは120回、ペナルティーゴールは6本、総得点は154点の増加、スクラムは8本、ラインアウトは70本、ラインアウトモールは22本の減少が見られた。2008シーズンに比べ2009シーズンではキックは48本、ラインアウトは54本、ラインアウトモールは30本、ペナルティーゴールは2本の増加、スクラムは32本、ラックは87回、総得点は56点の減少が見られた

「考察」

ELV導入によってキックの種類が変化したことで、ラインアウト減少という結果になったと考えられる。またこのことからカウンターはノータ

ッチキックの蹴り合いが続き、その中でカウンターに移行するという攻撃パターンが確立されたことで増加した結果となったと考えられる。モールの引き倒しが可能となったことでラインアウトモールが有効な攻撃オプションでなくなり、ラインアウトモール数の減少という結果につながったと考えられる。またスクラムに関してはスクラムからのセットATの難易度に変化はなく、ペナルティーからもスクラムを選択するチームが増加したことから、スクラムの数に有意な差はみられない結果となったと考えられる。ペナルティーゴールは得点を狙う攻撃パターンがゴール前のペナルティーではモールではなくペナルティーゴールを狙うというパターンに変化したこと増加した結果となったと考えられる。ELV本格導入によってモールディフェンスとして引き倒しが可能であったが、ELV本格導入後これが反則となりラインアウト、ラインアウトモールが増加したと考えられる。しかし、ラインアウトモールが増加したにも関わらず総得点が減少していることから2009シーズンは各大学ディフェンスのレベルがかなり高いものであったといえる。そのため、敵陣に入るためにキックの数が増え両チームによる蹴り合いが続き、試合がノータッチキックの蹴り合いというキック合戦となり敵陣でのペナルティーキックの選択を、ペナルティーゴールを選択することに変化はなかったと考えられる。

「結論」

ELV導入による大学レベルでの変化について以下の2点を結論とする。1. 導入によって敵陣でのペナルティーキックではペナルティーゴールを選択することが増加し、得点パターンが変化した。2. 両チームによる蹴り合いが続き、試合がノータッチキックの蹴り合いというキック合戦化した傾向が強まった。